

平成22年 6月 15日現在

研究種目：若手研究（B）
 研究期間：2006～2009
 課題番号：18730457
 研究課題名（和文） 統合失調症者の地域生活支援における当事者と地域をつなぐ心理学的
 援助に関する研究
 研究課題名（英文） Psychological support for patients with schizophrenia living in their
 communities
 研究代表者 重橋 のぞみ（JUBASHI NOZOMI）
 福岡女学院大学・人間関係学部・准教授
 研究者番号：30412688

研究成果の概要（和文）：統合失調症者の地域生活に対する(1)当事者(2)援助者(3)大学生の意識を検討した。(1)当事者の地域生活上の不安や生きがいについて、生活環境と年齢の違いから捉えた。(2)援助者（看護師）が新たな患者理解を行う場面として、心理劇が有効であることが示された。(3)大学生の意識変化に心理教育は有効であり、回数や内容の違いによる効果が検討された。また、当事者が情報提供者として大学生に関わった場合の効果も検討された。

研究成果の概要（英文）：Consciousness of (1) patients with schizophrenia, (2) supporters, and (3) university students towards the local community life of patients was examined. (1) Patients' anxieties and purpose of life in the local community was investigated in relation to their life, environment, and age. (2) Effectiveness of psychodrama was indicated when nurse supporters tried to understand the patients. (3) Effectiveness of psycho-education in changing the consciousness of university students was also indicated and differences in the effectiveness of education based on the frequency and content were analyzed. Furthermore, the effects of patients giving information to university students were examined.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	328,090	0	328,090
2007年度	1,671,910	0	1,671,910
2008年度	547,480	164,244	711,724
2009年度	452,520	135,756	588,276
年度			
総計	3,000,000	300,000	3,300,000

研究分野：社会学

科研費の分科・細目：心理学・臨床心理学

キーワード：地域援助、統合失調症、心理教育、地域生活支援、臨床心理学

1. 研究開始当初の背景

本研究申請時、厚生労働省は精神保健福祉施策に対する明確な方向性を打ち出し、受け入れ条件が整えば退院可能な72000人の社会的入院患者の社会復帰の明確な目標を提示し、10年計画のもと「入院中心の医療から地域の医療・福祉への転換」実現のための方針を示した。「入院中心の医療から地域への転換」を支援するための取り組みは、徐々に成果をあげたものの、当事者の地域生活における心理的問題の検討、また地域の受け皿である地域住民の心理的障壁のあり方、さらに両者をつなぐための現実的な援助およびその対応について、実証的な検討が少ない現状があった。

2. 研究の目的

近年の統合失調症者の病に対する捉え方は、一生を病院で過ごさなければならない病気から地域での生活が可能な病気へ移行し、本人および家族は病気とつきあいながら生活することが求められるようになった。しかし、上述通り、当事者・地域住民の心理的障壁、両者をつなぐ現実的な援助に関する実証的研究は少ない現状があった。これらの問題に対する把握および具体的な支援を検討するために、(1)当事者(2)援助者(3)地域の受け皿の「心の障壁」について検討し、3者関係をつなぐ援助を明らかにすることが必要であり、本研究ではこの3視点から検討を行った。なお、精神障害の代表的な精神疾患である統合失調症者を本研究の対象とする。

(1) 当事者（統合失調症者）研究

精神障害者の社会復帰に関する研究は、専門家からみた研究は多くあるものの、実際に地域で生活していく当事者の視点から、実際の声調べている研究は少なく、当事者が地域で生活していくことをどのように捉えて

いるのかについてまとめたものは少ない。当事者の意見を取り上げた先行研究は、当事者の意識を捉えることの重要性を指摘している。一方、地域生活に対する感情には肯定的な意味（いきがい）も含まれ、生活上の不安と生きがいの両方の意識を捉えた上で、実質的な援助を行う必要がある。そこで、精神障害者の地域生活に向けた不安と生きがいについて、当事者自身の声を捉えることを目的として研究を行った。なお、先行研究より、当事者の生活している場所も不安や生きがいに影響を与えられられたため、地域生活のスタイルの違い（自宅生活者と援護寮生活者）も検討内容に加えた。

(2) 援助者研究（集団心理療法実践における援助者の統合失調症者理解）

臨床実践における援助者（看護師）の統合失調症理解について調査した。慢性の入院患者は認知障害だけではなく陰性症状（情動の平板化）のために、その内面を理解することは困難である。そこで、情動体験にアプローチする心理劇場面を用いて、心理劇場面に触れることで援助者の理解がどのように変化するか検討した。

(3) 地域の受け皿（大学生）研究

精神疾患に対する教育的アプローチに、近年精神科臨床において注目を集めている心理教育（Psycho education）がある。数多くの先行研究の結果は、心理教育が当事者や家族の意識変化に有効なことを示しているが、その対象は、患者本人や家族にとどまらず、一般の地域住人に向けて実施されることも重要である。しかし、一般に向けた心理教育の効果についての検討は少ない。そこで、本研究では将来地域の受け皿となる大学生に対して統合失調症者を理解するための心理

教育を実践し、その効果を検討した。以下の4研究を行った。

心理教育の効果研究(1セッション) 1回セッションの心理教育の効果を精神障害者との接触経験との関係から検討した。

心理教育による意識変化 継続的な心理教育の効果を検討するため、大学の授業で心理教育を行った前後の大学生の意識変化を検討した。なお、接触経験も変数に用いた。

心理教育によるイメージの変化 従来の研究は、当事者に対する否定的な側面の意識を調査したものがほとんどであるが、肯定的な側面理解を含む検討が必要である。そこで、精神障害者に対するイメージ(否定・肯定)に与える心理教育の効果を検討した。

当事者との直接の関わりが精神障害者理解に与える影響 当事者理解を促すためには、知識を深めるだけでなく精神障害者との直接の関わりが重要である。情報伝達者として当事者にも協力を求め、直接の関わりの効果を検討し、当事者と地域住民をつなぐモデルの検討を行った。

3. 研究の方法

(1)(2)(3)の研究別に、方法を記載する。

(1) 当事者(統合失調症者)研究

協力者 精神科デイケア通所中の10名(以下、自宅住居者。男性6名、女性4名。年齢平均50.3才[SD11.79才])、援護寮生活者8名(以下、援護寮住居者。男性7名、女性1名。年齢平均33才[SD11.49才])。協力者は研究の同意を得、主治医より統合失調症者の診断を受けている。

質問項目 地域で生活するうえでの不安(対人関係、病気、住居、経済面)、地域で生活するうえでの生きがい(人への援助、仲間、主体性、楽しみ)、地域生活上必要なこと(家族、友人、相談機関、仕事、お金、居場所、病気の理解、趣味、自分の理解、薬、

その他の11項目から複数選択)、とは、はい、どちらでもない、いいえに回答。

手続き 質問紙を用いて面接にて調査を行った。

(2) 援助者研究

手続き 長期入院中の統合失調症者を対象に、週に1度の集団心理療法である心理劇を1年間施行し、心理療法中の患者理解について、毎回参加したスタッフに質問紙調査を実施した。

協力者 固定スタッフ(臨床心理士2名、作業療法士1名)と変化スタッフ(毎回違う看護師、2病棟より各1名の2名参加)。心理劇参加の統合失調症者は、入院中の統合失調症者(閉鎖病棟7名、開放病棟6名)。

質問項目 看護師評価は「安心」「親しみ」「発見」に対して、4件法(いつもより少ない~たくさん)で回答し、回答の理由を自由記述した。固定スタッフは、情動表出、自発性、協調性、共感性に対して評定。

(3) 地域の受け皿(大学生)研究

心理教育の効果研究(1セッション)

協力者 大学2年生から4年生145名。

質問項目 接触経験、精神障害者への意識。

手続き 協力者は2種類のグループミーティングを1セッション体験(心理教育グループ、当事者が語る生活上の不安を紹介し討論するグループ)。セッション前後に質問紙へ回答を行い、2グループ体験後の精神障害者に対する意識の変化を分析した。

心理教育による意識変化

協力者 精神障害者に対する心理教育の授業(4回)を受講した大学生(2~4年生73名:女性)。

質問項目 精神障害者に対する 接触経験(関わり、知人、関心、知識に対して2件法で回答)、意識(通院治療・生活可能視、隔離・蔑視、恐れ・無能視、異質感・接触不安、社会生活支援に対して、非常にそう思う

から、全くそう思わないまで5件法で回答)。
心理教育によるイメージの変化
協力者 上記と同様。

質問項目 精神障害者に対する 接触経験(上記同様) 意識(上記同様) イメージ。イメージは協力者の自由な表現を検討するため文章完成法(Sentence completion test)の手続きを用いた。項目は、精神障害者の楽しみ、悩み、主体性、友人、希望、他者援助の6項目である(例「精神障害がある方の楽しみは・・・」に続く文を自由に記述)。

手続き 上記と同様。

当事者の直接の関わりが精神障害者理解に与える影響

協力者 臨床心理学専攻大学院生22名。
質問項目 接触経験、イメージ・意識、病気の原因理解、自立に必要なこと、つき合う上で、大事なこと、地域および職場で働く場面につき合う上で、大事なこと、接触時の自分の不安、心の健康とは、講演後の感想。上記8項目は全て自由記述にて回答。

手続き:4名の当事者講師を迎え(男性2名、女性2名)一人30分間、各自が体験を語った。当事者の講演前後に質問紙記入を求めた。

4. 研究成果

(1) 当事者(統合失調症者)研究

自宅住居者と援護寮住居者に分け、それぞれが抱く地域生活に対する不安と生きがいについてインタビュー調査を行った(発表論文掲載)。なお、年齢による回答の違いが顕著なため、中年期前後を区切りとし、20~30代と40代以降の2グループ別に結果を分析した。

不安は、経済面で自宅住居者と援護寮住居者で有意差があり、援護寮住居者が経済面で

の不安が高かった。発言内容から、病気や経済面で年齢による違いがみられ、20代~30代は、働くことを念頭においた病気の不安、40代以降は地域で自立した生活を送るための病気の不安が語られた。20~30代は、自立や就労など経済面の不安が多いことが特徴的であった。

生きがいについては、生活スタイルとの関係は認められなかったが、「主体性」に年齢による差があった。若年層は、仕事に対する意欲が高く、上述の仕事に対する不安だけではなく目標が高かった。住居形式の違いによる不安といきがいには大きな違いはみられなかったものの、年齢による違いがあることが明らかとなり、発達課題に応じた地域生活支援を検討する必要があると示唆された。

(2) 援助者研究

臨床実践における援助者(看護師)の統合失調症者理解を調査した(本研究の一部は学会発表掲載)。その結果、心理劇において日常とは異なる患者の姿を70%前後の援助者(看護師)が捉えていることが示された。特に看護師は重度の陰性症状がある患者に多くの発見を行い、病棟生活とは異なる患者理解が心理劇を通して促進することが示唆された。看護師の発見内容を記述より分類した結果、自己表現、楽しめる力、自発性、未知の事実や気持ち、協調性、場に応じた対応の6カテゴリーが抽出された。これらの発見は病棟により頻度が異なり、閉鎖病棟では自己表現が、開放病棟では協調性や場に応じた力が注目されていた。閉鎖病棟の結果より、普段の病棟生活では見ることのない患者の一面をみて患者を理解するというプロセスが行われたと考えられる。開放病棟の結果からは、社会復帰のための訓練として、社会的スキルが注目されたと考えられる。

長期入院の統合失調症者は認知障害だけ

ではなく陰性症状のために内面を理解することが困難な問題があるが、このように臨床心理学的なアプローチにおける統合失調症者の姿に触れることは、両者をつなく働きかけになることが示唆された。

(3)地域の受け皿（大学生）研究

心理教育の効果研究（1セッション） 1回だけの精神障害の知識を伝達する心理教育を行った場合の精神障害者への意識の変化を検討した（学会発表 参照）。その結果、精神障害者に対する大学生の理解を促すには、(1)接触経験、(2)知識の伝達である心理教育が有効であることが示された。しかし、「蔑視・隔離」と「異質・接触不安」の2項目に心理教育の主効果がみられず、関わる自分自身の不安「自分が何をしたら良いかわからない」「相手を傷つけるようで不安」といった、自分に向けた不安は軽減しないことが示され、プログラムの内容をさらに検討する必要性があることが示唆された。

心理教育による意識変化 継続的に当事者に対する心理教育を行った前後の意識の変化を検討した（発表論文 掲載）。「蔑視・隔離」を除く全ての項目で、心理教育後に否定的意識が低減するという結果が得られた。授業では数回という非常に少ない回数であっても、心理教育を実施する効果があるといえる。前述の研究 では、自分に向かう不安「異質・接触不安」が心理教育では低減しない結果であったが、継続的な心理教育により、これらの不安が低減することが示唆された。なお、「蔑視・隔離」は、頭でわかっているが無意識の行動として反映される価値観を表す内容であり、これらの変化を促すためには、教室の中だけのアプローチでは限界があると考えられる。精神障害者とのコンタクトを自然に行える架橋作りについても検討する必要がある、授業枠の限界について十分理解し

ておく必要がある。

心理教育によるイメージの変化 心理教育を行う前の当事者イメージを、(1)の当事者研究の結果と比較したところ、「楽しみ」「他者援助」など、病の面ではなく健康な面に対する認識が大学生でも行えており、当事者と一致した理解を行っていることがわかった。否定的側面に対する認識が生じやすい精神障害者理解において、肯定的側面を理解できることは、対象を否定・肯定含む全体像として理解するための大事な視点である。しかし、「悩み」が発達年齢によって変化することを認識することが難しく、「やりたいこと」に対して否定的なイメージが多く、また「友達」に対して一面的な理解をしやすいなど、大学生が抱く当事者のイメージと当事者自身の捉え方には差も認められる。このずれを埋める関わりを検討する必要がある。

継続的に当事者に対する心理教育を行った前後のイメージ変化も検討した（発表論文 掲載）。心理教育後の大学生は、当事者の主体性について、当事者の実行の仕方に注目した表現から環境側の条件整備に視点を向けるようになり、また実行することによって生じる肯定的な側面へ注目した表現もみられるようになった。このように、心理教育の効果として、(1)否定的理解が低減し、肯定的な理解が増す、(2)自分も含めて周囲の理解をどう形作るかという自我関与した形での理解が生じる、(3)当事者を理解する際に、どのような行動を行うかという行動面の理解に加え、その背景にある心理に注目するようになることがわかった。

当事者の直接の関わりが精神障害者理解に与える影響 当事者が体験を語る講演会を行い、当事者と直接接触することによる参加者の意識の変化を検討した。その結果、講演前に統合失調症者に対して持っていたイ

メージに加え、講演後にあらたに加わる内容があることがわかった。それは、自我関与して問題を捉える内容（例：相手から学ぼうとする姿勢、理解したい気持ちの芽生え、自分自身への気づき）や当事者の気持ちに注目する内容（例：とても繊細で優しい気質をもっている）である。大学生に対して授業で行った心理教育の効果が検討されてきたが、この結果より、一般の人々の捉え方に変化が生じるには、病気に関する知識を深めるだけではなく、当事者との直接の関わりも重要であることが示された。

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計3件)

重橋のぞみ 心理教育が大学生の精神障害者に対する意識に与える影響 統合失調症者との接触経験の視点から一、福岡女学院大学人間関係学部紀要、査読無、10巻、2009、pp. 21-30、

重橋のぞみ 大学生の精神障害者に対するイメージに関する研究 統合失調症者に対する心理教育を用いて一、福岡女学院大学大学院臨床心理学、査読無、6巻、2009、pp. 43-52、

天野君子・重橋のぞみ 精神障害者の地域生活における心理的援助に関する研究 生活に対する不安と生きがい調査、福岡女学院大学大学院紀要臨床心理学、査読無、5巻、2008、pp. 67-74、

〔学会発表〕(計2件)

伊藤華那・重橋のぞみ・杉原康文・古賀聡 統合失調症長期入院患者への心理劇導入事例～グループの「成長」プロセスに注目して～、第35回西日本心理劇学会、2010年2月28日、鹿児島大学稲盛アカデミー棟

天野君子・重橋のぞみ 精神障害者の地域生活における心理的援助に関する研究 2 - 大学生に対する心理教育、第26回日本心理臨床学会、2007年9月27日、東京国際フォーラム

6. 研究組織

(1)研究代表者

重橋 のぞみ (JUBASHI NOZMOI)

福岡女学院大学・人間関係学部・准教授
研究者番号：30412688